

高銳
同高
二男
禮

上

津田文庫

文庫 1

1529

1

30

25

20

15

10

010190606908

高銳一同譯
高良二同譯

男乃禮

塘麓學社藏版

1529-1

附言

西洋民俗の常として衣服は禮節の儀あり。饗應
は接對の式あり。其他慶賀吊慰消息話言よこへ
各心得べきことと多かりける。されば其儀式の
中にも我が國の習は適ふ者ハ固より取りてこ
れ採用ひ。其適はざるも尙ほ存して參考の資と
ふさん。よハ民間交際の上は就けて必は禮容温
雅にして人の敬愛被受るとと深らるべし。況し
て今ハ廣く萬國は交はりて厚く信義を結ぶの
日なるをや。夫も都人ハ物見よまからて善き衣

男禮附言

着飾りせぬ折も、その程のきは、皆きよらよゆ
らしげなり。鄙^ビひたる人の、祝ひの席^シありて飯^イ
ぬどせ、りくゆさま、何となく、椎^ヱの葉ふ盛り
し手振思ひやられて、見るよはつかしくぞ覺也
る。是ふん都鄙^トの分ちよてさる例^レあれば、其餘
ハ問ハせして知らるべき。誠^マニ世界の開けたる
氣^キ運^{ウン}を考ふるよ、彼の巴里^パ、倫敦^ロハ人文^ブ昌^{チャウ}明^{メイ}の都
會^カふせば、我が國人の見知らざる者一二^ニ汲^キもて
數^スへ盡^スひべうもあらじ。頃^キ日^ニ子^シが弟^{テイ}と共に英^イ書^{ショ}
男^オ禮^{レイ}を斯^スく譯^イ述^{ショ}、そまよ、ゆくと女^メ禮^{レイ}をも併^ヘ

せて全體^クを具^クへんと思^フふなり。さてこれを見む
人^ニハ、いざ心^コハしらる。

明治八年春三月

高銳一誌^{カウ}

男禮目錄

上篇七則

衣服

挨拶

紹介

見舞

消息

添書

客問

下篇五則

饗應

舞踏

進物

話言

心得

全篇十二則

男禮上篇

つだ文庫

高銳一

同譯

高良二



衣服

夫れ始て目づる物ハ。いと心よ感ぜるとい深け
 せば。久しきを経て。も忘ぜざる者あり。さるよ
 りて。その人を感じ忘むる者ハ。必だよき見えを
 現ハせこそ肝要か。人よ逢ふてその衣服を見
 せば。始てその人の容子を知るよ足る者ゆ。衣
 服ハ人の風儀よりも。却りて著じし。實ハ人と

出て合ひ。或ハ初見の間ニ在りてハ。人唯衣服をのみ見認るとの多けし。能くこれ品ニ心を用ゆべきあり。

人の思を述ぶる者ハ。語法ニ在りて。人の形を飾る者ハ。服制あり。服制あれば。人の品柄を加へ。ことかければ。品高き人だと賤しまれん。されば。心を衣冠ニ用ゆる人。立身せる例し世ニ少からざして。ことを怠れば。富貴。婚姻を求むる。此道も。その身においてあかるべし。

人の衣服は。必その年齢に應じ。その容貌ニ稱はしむべきあり。されど。此の人に似合ざる衣服のたまふ。彼の人に似合ふ者もあり。され。善く衣冠を整ふるの習は。獨りその時の模様に従ひ。その身の恰好に因る者あれば。爰に一定の服制を設けると甚だ難し。又これ設くとも。その益あかるべし。さるからに。今唯その大段。彼人に示して。これに由らしむるのみ。その見場。装飾に及んでは。各その身の工夫と心懸の善し悪しに在りと。され。天然いか程醜くければ。とて。憂ふるに及ばざ。似合ひる衣冠。装着せば。大

にこれ取れ取り繕ふべし。譬へば、頬に黒き斑點ありて、その光烏鰯ウサマに均しく、或ハ鼻の色赤くして紅石ベニイシに似たりとも、乃服乃程よき色合をもてこれを飾りなば、人皆その光澤ツヤの異なる故怪しまだ。反りてその目取喜ばしむるとあるべし。それ、人ハ皆アドニスアダムの如く生れながらにして、美麗ならざといへど、イローツプイロツプと似て醜惡に見ゆるハ、又その身が過ちとやいじん。目性の弱き人ハ、鼻眼鏡を用ひ、又不具ある所あるば、色取りたる者を懸くべきあり。斯くて、その

色ハ、水色からで、天色あるべし。そも、青眼鏡ハ、下品よて藍色の者ハ殊よ上品なり。面部の不具なるハ、すべて髪カミの飾り様よて蔽ふよハたせど、染め髪をふせよ。その色ハ、口鬚クチヒゲと異からざるやうありたし。又鬢カウを蒙むるよハ、充分大なる者を用ひて、髪毛を殘らざ納め入せ、亂毛ミダシカミのふきこそよげせ。往來着用の服製ハ、さまで儀式よ拘ハらねば、各そのよき程よ従ふべし。但餘り派出ハツある羽織ハネオリその外目立ソトメしき者ハ、すべて用ひせ。

常羽織ハ。その人の長けを飾るに用ふる品なれば。餘り低き人あるか。又ハ高きに過たる人ハ。儀式の外。常よこぎを用ゆべし。
饗應の席。或ハ。客間に出る節ハ。客羽織を用ふるなり。沓ハ。近來長きを用ひけるが。反りて半沓ハ。絹足袋の方を良しといひ。
凡ろ他出して人多き場所。寺院。戯場いばの内ハ在るか。又ハ途中の往來ハ。常よ手袋を着くべきなり。手袋ハ善くろの手み合ふべくして。聊も垢の染みざる者と限るべし。

舞踏。或ハ。囃會はしに赴んじひる時。獨り鏡にて己が姿を寫し見ると幾度と及ぶじふ。猶ほ足らざるあり。斯る時ハ。必だ家内の者。或ハ。友同知ともちみ請ふ。好く我身の前後を見せしむべし。余曾てこの心得なき人の舞踏に席に入り來るを見しが。その衣冠ハ。買ふ立派なれど。一方の「ツボ」釣ハ。足元に落ち懸りて。恰も冠の紐の如く垂きてありし。思ふよ。その人の鏡も。前を照して。後を照はと能はざるあり。
衣服の立派といふべきハ。唯その價は高きよあ

ろ。又その飾り物の多き由ら。凡そ飾り物
 玉の指輪。金の鎖など。み費して。とを耀は。不
 粹の至あ。さば。正服を用ひて奢ら。上へ下
 好き釣合をとり。粹よして飾りあ。そ。人
 の心を奪ふに足るべけ。
 心を衣冠を用ひてその程。失へば。却りて。そ
 害あると。猶ほ。とを怠る者。均し。さるによ
 りて。男子乃衣冠を整ふるよ。善くその中を得
 る。伊達なら。又野父。ら。を良しと。
 衣冠の着振を品定ふ。獨り婦人に止まるの

み。それ。婦人の専ら。それらの事に由て。その身
 を保護者あれば。固より。これに習れて。備えりた
 りといへど。別よ。一種の不思議ある天性を受る
 よ似て。それ衣服などの善し悪しを見分たへき
 感能あると。男子の及ばざる所あり。さば。男
 子あて。服製を褒むる。取るに足ら。婦
 人の許しあるに及びて。自ら。その全備を信
 ぜべきあり。
 徒らに衣裳を飾り。利益を望む。人の心を
 動さ。足ら。とりて。餘り衣冠。心さき。

恐らくばその不利却りて多かるべし。マヌーヘ
イル君曾て弱年の折柄常ニ麤服を着用せしが、
水夫の爲ニ勾引されしともありき。或る米利堅
人の談話ニその人曾て旅館ニ入んどせし時一
人のいと麤體なる者を見てその家の召仕から
んと思ひ流し。とせよ命じて旅具を運び入せし
めたる後既に些少の酒代を與へんとせしが。意
ハざりき。とハ一個の貴族某にて。當時米國に比
類なき政事家の一人あるを始て知りありと。
我家に來客ある時主人ハその衣服を着飾ると

なし。とせよ善き習よて缺くべからざれ者あり。
皆ハ新しき手袋乃清らかかる。手巾乃白き。これ
皆男子に在りて目立者なりとは。人の知れは
となるが。染めし髪の毛の色。接ぎある鼻の高さは。
殊よおろしくぞありける。

挨拶

或るフランスの作者が云ふる如く。人の挨拶は
も顔見れば。その育立の高下を知るべし。又世の
中に拜首の數少きより。その身の零落。招く者
は。獨りアブサロムに止まらざ。

時と處の宜きに隨ひて。挨拶に異同あり。或は恭しく。或は親しく。又嚴格なる。慇懃なる。狎れしきもありと云。さるによりて。或は頭を下げ。或は手扱握り。或は帽子を手を加ふ。或はこれを脱ぎ去らなれ。

帽子を脱ぎ去れば。その時必しを腰扱折るに及ばぬ。唯僧長などに逢ひて手厚く挨拶する時ハ。とせと異なり。

途中より婦人に出逢ふ時は。先方より頭を下げ。己を見認る後。始てとせと語らへし。若し。

己を知らざし。過ぎ去れ。會へば。作法とし。とせと挨拶を禁せし。殊に近附する婦人。又は。とせを禁せぬ。位は。位なき者。會ひ。その帽子を脱ぎ去れを見れば。己も同じ心得ありたし。

ラ。フォンティン氏に説く。拜禮は。恰も人其券を持ち來り。目其富り金銀を催が。如く。人より。挨拶を逢へば。亦己も充分とせ。償ふべし。英王チャールズ二世及びジョージ第四世ハ各當時は。いと尊むべき人なれば。それ下民の殊に賤

しき者よさへ。常に脱帽礼を行ひしとぞ。
 朋友或ハ同輩乃者ハ。謙遜ニ過ぎたる拜首を
 用ふべからざ。又伊達者ハ風儀を咎めんとする
 時ハ。稍横柄なる挨拶をさし妨げざる也。そ
 の人ハ拜禮を受るに臨めば。唯打ち驚きたる様
 をさし。何某君。へい。へい。と云ふこともあるべ
 し。
 町内にてたまニ婦人ト行き逢ひ。とせと物
 語をさばやと思へる時。いか程親しき間柄と
 引留むべからざ。自から道を枉げて立戻りしが

ら。その婦人と連れ行くべし。斯くて。それ町の端
 末ニ至れば。別れ去ることを得る者なり。
 さまで親ららざる婦人ハ行き逢ふ節ハ。唯拜禮
 をなすのみとて。とせと言葉交ふることもなし。
 婦人を挨拶するの禮ハ。手を帽子ニ加ふるをも
 て足れりとせざ。全くとせを脱ぎ去るへし。これ
 時挨拶を受くべき人と相對せざる手を用ふる
 をもて作法とせ。とせば。その身右側を過せば。右
 の手にて帽子を脱ぎ。左側なれば。又左の手を用
 ふるあり。

人多き場處にありて挨拶はる時ハ、他聞を憚かりて、その人の名を聲高と呼ばせ。名を求むるハ人間の情ふれど、我名を往來の者よまで知し是んとはる人ヤハあるべき。

紹介

紹介ハ、常に先づ目下の者を目上ある人へ引合せしむべし。そも目上目下の分ちハ、唯人の身性を指して云へる者ふれば、上に述べらる意は、男子を婦人に引合せしむることありと云ふ。

同化身柄は男子を相互ふ引合はれ節「イ君」「ロ君」

と唱ふるに隨ひて、必は又「ロ君」「イ君」と呼び、その紹介の禮は、甚だ簡易にして偏らざらばべし。

男子を婦人に引合はる時は、先づその許しを受くべきあり。又男子相互の折は、必はしもこの作法を行はせしむべし。人を他人に紹介してその交を結ばしむる時、甲の人と云は望めど乙の人望かければ、相互にこれ引合はるべからざ。斯る時は、その身乙の人と交深からざる旨を述べて、その紹介を否むべし。そを人に勧めてその避けんとはる者と交結ばしむるは、却りて、

知らんを求むるの謂きあり。さきどその席ふ止
まる間ハ。未だ見知りざる人たりとも。とせと言
葉を交ふるハ。恰も親友の如くあして。一坐の縁
を取り結ぶべし。
人を見舞ハんが爲め。客間に入らんをせよ。己
が名を知りある者かけせば。直ちよこせを傳ふ
べし。又家内に見知りある人あせど。たまへ廣間
にあはせして。その外の者の居合をを見せば。自
かく進みて紹介をべきあり。さかけせば。その時
は不問なれこと想ふべし。

見舞

見舞の類多し。慶賀。吊悔。禮式。懇意の別ちあり。
その作法皆同じからず。
慶賀にもその類多ければ。今一定の作法を爰に
示し難し。但慶賀の節は。その實よ過ぎず。祝儀を
述べたことあかれべし。
吊悔乃見舞ハ。必だ一周日乃間にあはれべし。又親
族及び分けず睦むき朋友に限る。その身見参
るべきあり。その時餘人よし。見参よ及び。話言
あどを催はる。その乃心安からず。又禮は宜を失ふ

といふべし。されよよ。凡そ吊悔は、その身内
ふれか。又は親友の者よあらざれば、唯手札を立
關に留め、去れを好しといひ。

禮式乃見舞には、長坐をべからず。それ身繁多に
る片時も惜むべき折に、こせを行ふべし。させと
懸意乃見舞は、物毎にべとこせと異ふ。

話言乃體裁は、見舞に類に應じて、るは趣を異に
ひ。させば、人を吊むらふ節、こせと詩文の事、或語
らざ。又禮式乃見舞に赴むれば、それ席に、經濟
學問を演ぶることなし。

通例の見舞には、一枚の手札を留め置くべし。さ
せと、家内に嫁しづきたる女。或は、未だ嫁しづら
ざる内室の妹あり。この外にも留め客ぬどあり
る。何れも内室の外に見舞ふべき人の同居せよ
折は、手札二枚を留め、その一枚は、内室に當り
一枚は同居の者よ遣はぬ。又その家の主人ふ
る。或は、内室の内一人を知り、若し兩人を
併せ、見舞はんとせば、亦二枚の手札を遣はひ
べし。そも、一枚の札を用ひ、その一と隅を折せ
ば、家内の一人に遣はひの意を示し、その兩隅、或

は片側を折らぬも二人に當りては仕來りては
今み至りて多くは棄ちてたす。

人に返すべき者は見舞と借りし傘ぬりてさきと
見舞を返す節には必しもその身見参りぬに及
ばざ。唯手札を留れば足りて返す。

消息

それ消息の禮として手紙の終りには必ぞ恐惶
謹言。頓首百拜の如き謙遜な返文句を用ふれど
き。唯これは禮數にて更にその實ありと心得べ
からざ。さるによりてその身の高貴なれば特み

或は先方の人柄を忌み。此等の文句を用ふれ
に憚かたことかかれ。

用向の手紙を認むれに天地色取りたる紙と
用ふれば至りて野鄙なり。この時は常に無地の
紙かたべし。月日は必ぞ初より記し。先方の姓名
は各その好みに従ひ。亦とを初に認むるも
妨げざ。但とを認む時は(君)字の上に置く
べし。

男子に遣はし手紙はいと長き紙は紋形なき者
を用ひ。とを封じ袋に入れべし。實に此等

心得は、まへに肝要ありと云ひ。
さゆと親からされ人みは、唯君と云へど、貴君と
云はど、従前高貴なる人へ送る文體は、尊君など
の字を用しが、今はとをを行はど。
招待状、又は、その返書とも、常に封じ袋を用也。
商用の外、諸向の消息は、今全く封蠟を用ひて、
封糊を附くこととし、男子と遣はる手紙は、赤
蠟もことせを封じ、婦人には、美はしき封蠟より
香氣を入らざれる者を用ふるか。

男子と遣はる消息は、自他相對の文句は
用ひてして、三人稱の體裁に依るべし。惡意ある
消息とも、此例を用ふることあり。又相互の不和
を生ぜるか、或は、間違の起りたる時、その手紙は、
如何程長文段たりとも、必だ三人稱採用ふべし。
用向の手紙は、人の論說相談に異なるとさく。
先づ用事の主意を明白に述べ、後漸くその
譯柄、模様に及ぼすべし。さすれば、人の願を斷はら
んとする時、その由を約やかに手紙の發端に
認め置き、殘念の意は、その次に精はしく述べ盡
すべし。曾て國會人選の時、ボルク君プリストル

の縣廳にて。コーム氏死去の事を談ぜしが。その體裁猶ほ今日用向の手紙に用ひて法と云はれど。足れり。その時實情を初に述べつゝ。諸君我に敢へて今般の選舉を辭はといへる後。その譯柄を委細に論ぜらんと半時の餘み及べりとぞ。手紙の文句。英文は佛語より較不足なる所あれど。猶ほ尺牘の觀るべき者少からざれば。善く消息の法に達せんと望む人は。とぞ或讀みて反復すべきあり。ホルドバイロンの伊太利國より送りし書簡に。恐らくば英語に在りては。いと全備

せる者ならん。固じよ常ならぬ心を勞して作りたる者なきと。これを見る時。一筆よて成る者の如し。ホレス。ウアルポールの尺牘に。その風雅清麗世に比類なきを覺ゆとぞ。又作意の跡を尋ねべし。グレイの文に至りては。いと愛するよ足る者あり。

凡そ手紙に深く知りたる友に遣はれよとて慎みて。その量見存意を載せざるやう心得ありたり。この手紙に。焼き捨てがしと請ひて送るとも。未だ先方のとせよ従ふ者あるを見ざるあり。デ

スリヤリ君の話も。曾て、チャールズ王第一世時代の歴史を調べてありけるが。當時の舊き書簡を多く見出せしよ。その文中を見れば。皆一覽の後。速よ火よ投ぎべき趣を痛く請ふ者ありしと。そと。送りたる手紙ハ。ととを他人よ示とことと恐おけとばとて。若し紛失して他見よ觸とば。その害亦異あらど。且つ今日親愛とべき朋友の變心せんも計り難し。そん。時日の過ぎ去ることや。一瞬よ出でせと。朋友の心を變ぜしむれり足るべき勢ハ。猶ほ雷雨の乳味を敗るが如く速か

まり。又先方の量見ハ變ぜと。その身窵よ心底を變ぜるともあせば。その時この變心被證いべき者ハ。獨り自筆の書翰にて。その害亦想ふべしと。ハ。爰に。ラブル井エ井ル氏の確言。大よ消息の往來に必用さる者あり。この思慮深き人の説に。朋友と交るよハ。他日讐敵と成らん者の如くし。讐敵と居せば。他日朋友と成らん者の如く。是れ己を重んぶるに非ど。又人を憐むよも非ど。獨りそれ身を保護の一策ありと云り。

添書

添書ハ、こぎを巻き封じ袋ニ入きて封紙着けど、
その届け方ハ、若シ先方ハ人ヲ其身と同輩カレ
ば、手札紙添へて己ガ寓居ヨリ送るべシ。その後、
先方ハ來りて見舞をなし、心の及ぶべき程、必
深切を盡す者ナリ。若シ、こぎ紙怠せば、その無禮
なること一かたからざして、添書を認め、又こぎ
を持参する人まで輕んぶるゝ近シ。
若シ、商人へ遣はべき添書、或ハ、貴人ニ送るべき
者カレば、その持参する人、自からその家ニ至り
てこれ紙届けべシ。是れ一ハ、その繁用を憚かり、

二ハ、その身柄を重んぶればあり、

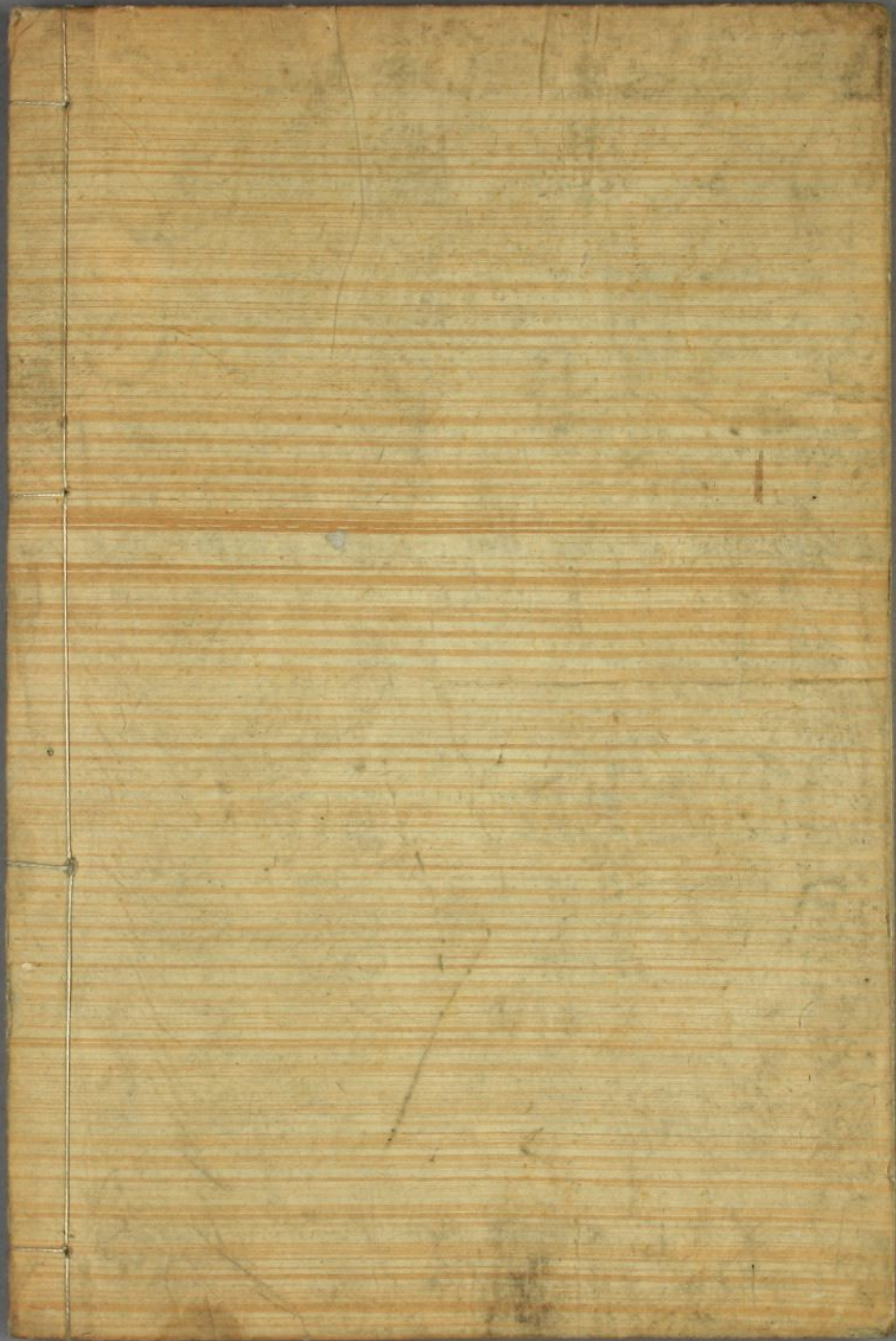
客間

客間に入る折柄、その場ニ舞踏、或ハ、噺會の催し
ある時ハ、必だ先づその家を内室に挨拶をさし
て、招待の禮を述べし。この禮終らざれば、いと
親しき友たりとも、これと言葉を交へざ。
されど、若シ、遅刻に及びた時ハ、必だしも先づ
内室ニ挨拶するに及ばざ。この時ハ、手近ニ居合
せる人に向ひて會釋をさし、漸やく内室
ニ及ぼすことを得べけれど、慎みて無用な話言

を省き速にその禮を招待主へ行ふべし。又坐客の未だ退かざるに先ちてその身立去んとせむ時ハ何れもその由を告げせして坐を退き務めて人に見知られぬ様ありたし。寄合は席に在りてハ客の隨意に交はるを許さざといへど更に尊卑は別ちあることなし。さるゝ因りてこの席に入りてハ坐客の尊ぶときも卑しきも皆平等に取扱ふべし。己が好みに任せて相客を嫌ふハ第一その家の内室に對して不敬なれば必だその招待せられたる人を一様取

扱ひて内室の禮意に戻らざるべし。噺會の招待を受けば約束を違はざるやう心得あるべきあり。若しことを受る後その日に至りて不參の申譯をかひハその家の内室に對して無禮あり。殊に雨天の申譯もて約束を違へるといふかざるべし。そも天氣の惡しき節にハ他客も多くなば不參する者あれば招待主に在りてハ坐客の少き誠訝かりてその心は快からざる者なり。雨具馬車の便利あれば雨天の節も見參する人ぞ深切かりと云。

男禮上篇終



高銳一
高良二
同譯



男乃禮

塘麓學社藏版